

「に」と「で」の情報伝達機能(1)

—中国語「在」と対照して—

呉 淑圓

キーワード 情報伝達、焦点要素、非焦点要素、不均斉、対応関係

0. はじめに

本稿は、日本語の格助詞「に」「で」を中国語の介詞「在」と対照しつつ、情報伝達¹⁾という観点、あるいは焦点の有無という観点からそれらの用法を考察しようとするものである。このような観点に立った研究は、少なくとも「に」と「で」に関する限り、これまでに存在しない。

「に」と「で」に関する従来の研究は大部分、両者の意味機能についての研究である。以下に紹介する三つの先行研究もその例外ではない。

神尾(1980)は、「に」および「で」の持つ語彙的な特徴あるいは制約について次のように述べている。すなわち、「に」は、述語句が必然的にある空間的位置と結びついている場合に、あるいはある方向への指向性の意味を含む場合に用いられる助詞である。一方、「で」による位置の指定はしばしば恣意的、偶然的であって「他の場所もありうるが」という含みを持っている。「に」は述語句と直接結びついた位置の指定を行い、「で」は文全体と結びついて述語句の表す動作、出来事、事態などの生ずる背景となる場所を指定するという文法的な相違に関連する意味構造上の特徴を持っている。文法的・意味構造的な特徴は、述語句の表す動作、出来事、事態などとこれらの助詞との関係という見地からすれば、「に」が述語句の表す動作などに関わる空間的位置を直接的に表現するのに対して、「で」は述語句の表す動作などを間接的に背景となる位置に結びつける。したがって、述語句と「に」との意味関係を<内的な位置関係>と呼ぶならば、述語句と「で」との意味関係は<外的な位置関係>と呼ぶことができると神尾は述べている。

中右(1995 a, 1995 b)は、日本語の格助詞「に」と「で」はともに多義だが、特筆すべき共通性があると述べている。その共通性とは、いずれにも<位置>を合図する働きがあるということである。また、「に」は<個体>の位置を合図するのに対し、「で」は<状況>(状態、事態、現象などを含む総称として

用いる)の位置を合図するという。文法的にみると、「に」が典型的に基本述語に内在的な項 (argumenet) を表示するのに対して、「で」は随意的な附加語 (adjunct) を表示するという。「に」格の実体が当該事態に内在化されたく不可欠な>位置空間を指し示すのに対し、「で」格の実体は当該事態にとっては偶然的な>位置空間を指し示すのだというのである。

田中・松本(1997)は、「に」と「で」の違いを次のように説明している。「xで」と「xに」は、動詞との関係で言うならば、「xで」が外在的關係を、「xに」が内在的關係を取り結ぶという違いがある。この違いは、両者の操作子機能の違いから説明される。すなわち、「xに」は<xを対象指定し、動詞的チャックに差し向けよ>を要請するため、差し向けられた対象は動詞的チャック(述部)の中に取り込まれる。これに対して、「xで」は<領域限定を行い、動作を予期せよ>を要請するため、領域がまず限定され、その領域(状況)で動作が起こる。ここで言う限定化された領域とは出来事の場を提供するものことであり、それと動作とは外在的な(あるいは副詞的な)関係にある。<モノ限定>の場合も同様に、モノを限定し、そのモノでもってある動作・出来事が引き起こされる。「xで」は、動詞の内的な項に含まれないという理由により、動詞との関係は外在的である。

以上、「に」と「で」の意味機能についての三つの先行研究に触れた。

1. 「在+トコロ」表現の位置とその機能

中国語の場所表現「在+トコロ」は述語動詞の前後に現れる。述語動詞の前であれば前置式、述語動詞の後ろであれば後置式と呼ばれる²⁾。本稿は前置式を「在+トコロ+動詞」と、後置式を「動詞+在+トコロ」と呼ぶ。以下、本節では「在+トコロ」の機能がその位置の違いによってどのように異なるかを、従来の研究を踏まえながら論じる。

「在+トコロ」の機能が位置の違いによって異なることを最初に指摘したのは、張(1953)である。張は次のように述べている。

處所詞跟在介詞“在”“向”等的後頭、有時既可以作某個動詞的修飾語、也可以作它的補足語、意思大體近似、如：“坐在椅子上”“在椅子上坐下”、“向東邊走”“走向東邊”。區別是：第一、作修飾語時、意念上着重在動作；作補足語時、意念上着重在處所。第二、作補足語時、動詞往往是單音詞；作修飾語時、動詞往往是多音詞、或是帶有其他成分。(p.141)

この張の指摘によれば、トコロ名詞が「在」「向」などの介詞の後ろにくる場合、述語動詞の修飾語としての機能を持つだけではなく、動詞の補語としての機能も持っている。そこで、例えば、「動詞+在+トコロ」と「在+トコロ+動詞」の違いについて言うと、前者は主に場所に重点が置かれ、述語動詞は単音節語³⁾が多い。一方、後者は動作に重点が置かれ、述語動詞は多音節語になる。

劉ほか(1983)もこれと同様の指摘をしている。山口(1988)も、知的意味を同じくする「在+トコロ+動詞」と「動詞+在+トコロ」について、福地(1985)⁴⁾に言及しながら、「両者には何らかの違いがあると考えられる」と指摘している。さらに、情報構造の裏付けに基づいて、張と劉の指摘、すなわち、「在+トコロ+動詞」構文では動作に重点があり、「動詞+在+トコロ」構文では場所に重点があるという主張が妥当なものであると述べている。

さて筆者は、先行研究で言われていることに疑義を覚えない。したがって、筆者がこの節で行おうとするのは先行研究を否定することではなく、みずから収集した実例によって従来の説を裏付けることである。

まずはじめに、「在+トコロ+動詞」構文を取りあげる。

- (1) 我告訴珠惠這樣一直不停地責備已經沒有任何意義了,我還故意露出頑皮的微笑:

「喂！你知道這船怎麼會在沙灘上走來走去嗎？」

「當然是有人移動它嘛！」(p.56)

(原文:私は、私をなじりつづけることは、もはや何の意味もないのだと珠恵に言い、わざといたずらっぽく微笑んで見せ、「ねエ、どうして、この舟は、砂浜の上で動き廻ってるんだらう」と話しかけた。「そんなの、誰かが動かしてるのに決まってるわよ」)(『胸の香』p.48)

- (2) 「對不起，讓妳久等了。剛剛要出門時，在門口滑了一跤。」

「受傷了嗎？」

「只是扭傷了腳。」(p.167)

(原文:「ごめんなさい、お待たせして。出かけようと思ったら、家の前でちょっと足をすべらせてしまったの」

「じゃ、おけがでも？」

「ちょっと、ねんざしただけだけけど」)(『石の森』p.167)

上の二つの中国語の例は日本語で書かれた小説を中国語に翻訳したものからの引用であるが、そのいずれにおいても話し手と聞き手の応答から文中のどの

要素が重要な情報であるかを判断することができる。(1)の場合、「喂！你知道這船怎麼會在沙灘上走來走去嗎？（ねェ、どうして、この舟は、砂浜の上で動き廻ってるんだろう）」という質問に対して「當然是有人移動它嘛！（そのなの、誰かが動かしてるのに決まってるわよ）」と答えている。これによって次のことが分かる。(1)の下線部において重要な情報を表している要素、すなわち焦点要素は、「會……走來走去嗎？（どうして動き廻ってるんだろう）」の部分である。「在沙灘上（砂浜の上で）」は重要な情報を表していない。これは非焦点要素である。(2)についてはどうであろうか。「剛剛要出門時，在門口滑了一跤。（出かけようと思ったら、家の前でちょっと足をすべらせてしまったの）」という発言に対して、「受傷了嗎？（じゃ、おけがでも?）」という問いが発せられている。このやりとりから、場所を表す「在門口（家の前で）」も動作を表す「滑了一跤（足をすべらせてしまったの）」も新情報⁵⁾であることが分かる。しかし、情報の重みづけは動作の方にある。仮に関心の中心が場所であり、場所が焦点要素であったら、「受傷了嗎？（じゃ、おけがでも?）」という問いは発せられない。

以上の二つの例を分析して、「在+トコロ+動詞」構文においては動詞の部分が焦点要素であり、「在+トコロ」の部分是非焦点要素であることが裏付けられた。

次に、「動詞+在+トコロ」構文について考察する。この構文では、情報の中心は動作にあるのか、それとも場所にあるのか。このことを以下にあげる事例に即して考えてみよう。

- (3)「也許今天晚上所說的話對妳並沒有任何意義。但是把種子播在好的土壤中，種子自然會長得很好；把種子播在石頭地，種子就會枯萎。至於妳是好土壤或石頭地，就全看妳自己的表現了。如果妳偶爾想到我，可以依名片上的電話打電話給我。」(pp.142-143)

(原文：「今夜わたしのいった言葉は、君にはたいした意味を持たない言葉かも知れないね。よい地に種をまけば、その種はよく育つ。石地にまけば枯れてしまう。君はよい地か、石地か。まあ何かの時に思い出したら、その名刺のところに電話をくれ給え) (『石の森』 p.140)

- (4)「噢，風間君啊，還有，你也知道吧，今天啊，神奈川のSAKVIA交際舞協會有五十名會員要來，餐廳和大廳兩邊就麻煩你了。若杉君和阿春會負責溫泉，客房就交給澤木君他們…還有，幫我把這兩件禮服拿去掛在我房間的拉門門框上。不要放進衣櫥裡喲。」(pp.20-21)

(原文:「ああ、それで、カザマ君。今日は、ほら、神奈川のサルビア会の方、五〇人だから、よろしくお願ひします。レストランの方とホールね。温泉の方は若杉君とハルさん。客室の方も沢木君達が回ってるから。……それから、このドレスはロッカーの中じゃなくて、私の部屋の鴨居にかけておいてね。)(『ブエノ』 pp.20-21)

- (5) 儘管如此，這兩天我都在談這個事件。在談話間，我開始錯覺這個事件已不是他人的事，而是發生在自己身上的事了。(p.111)

(原文:それにしてもこの二日間、私はこの事件のことばかり語っている。話している途中で、私はこの事件が最早他人事ではなく、自分の身に起こったことであるかのような錯覚を覚え始めていた。)(『姑獲鳥』 p.145)

- (6) 「我要求明天延緩一天。明天一天如果無法追究出真相，審判官就會出面……這麼一來，牧朗先生的事件和嬰兒事件，所有虛實合而為一，會同時公開吧。但不是發表在這種亂七八糟的雜誌，是報紙，即使妳的家人無罪，這個家也會毀掉。」(下) (p.83)

(原文:「明日一杯時間稼ぎをしました。明日中に真相が究明されなければ、司直の手が伸び——そうなれば牧朗さんの事件も、赤児事件も、虚実を合わせた凡てが一斉に表沙汰になるでしょう。こんないい加減な雑誌ではなく、新聞に載ります。仮令あなたの家族が無実であったとしてもこの家は崩壊します」)(『姑獲鳥』 p.397)

上の(3)~(6)では、「在+トコロ」がすべて動詞の後ろに置かれているが、注目すべきことに、これらの「在+トコロ」はいずれも対比的に用いられている。ところで、対比的に用いられた要素は常に焦点要素である⁶⁾。したがって、上に引用した「在+トコロ」はいずれも焦点要素ということになる。

以上により、動詞の前に置かれた「在+トコロ」は非焦点要素であり、動詞の後ろに置かれた「在+トコロ」は焦点要素であるということの正しさが裏付けられた。しかしここで改めて述べておかねばならないが、本稿の目的はこの事実を明らかにすることではなく、この事実をもとに日本語の「に」と「で」の使い分け、特に情報伝達機能の違いを明らかにすることである。

2. 「に」「で」と「在+トコロ」の対応関係

本節の目的は、「在+トコロ」の文中での位置による機能の違いをもとにして、

「に」と「で」の機能の違いを予測することである。前節で述べたように、「在+トコロ+動詞」構文における「在+トコロ」は非焦点要素、「動詞+在+トコロ」構文における「在+トコロ」は焦点要素である。仮に前者の「在+トコロ」と後者の「在+トコロ」とが同じように「に」あるいは「で」と対応するならば、「に」と「で」の間に情報の重要さにかかわる差異は存在しないという仮定が導かれる。しかし仮に、前者の「在+トコロ」と「に」「で」の関係と後者の「在+トコロ」と「に」「で」の関係との間にある種の不均斉が観察されたならば、「に」と「で」は情報の重要さに関して異質のものを有するという予測が成り立つ。

このような問題意識をもって、筆者は中国語の「在」と日本語の助詞「に」「で」との対応関係について統計的な調査を行ってみた。調査の対象とした資料は、日本の小説11作品とそれを中国語に翻訳した11作品である。調査結果を表にまとめると、以下のようになる。

作品	構文	助詞	
		「に」	「で」
『水辺の』	在+トコロ+動詞	38例 (26.7%)	33例 (51.5%)
	動詞+在+トコロ	104例 (73.2%)	31例 (48.4%)
『胸の香』	在+トコロ+動詞	19例 (25.6%)	44例 (81.4%)
	動詞+在+トコロ	55例 (74.3%)	10例 (18.5%)
『カンガ』	在+トコロ+動詞	36例 (31.3%)	41例 (74.5%)
	動詞+在+トコロ	79例 (68.6%)	14例 (25.4%)
『風の歌』	在+トコロ+動詞	21例 (24.1%)	22例 (73.3%)
	動詞+在+トコロ	66例 (75.8%)	8例 (26.6%)
『秘密』	在+トコロ+動詞	37例 (23.7%)	70例 (76.9%)
	動詞+在+トコロ	119例 (76.2%)	21例 (23.0%)
『石の森』	在+トコロ+動詞	13例 (28.8%)	11例 (50.0%)
	動詞+在+トコロ	32例 (71.1%)	11例 (50.0%)
『哀しい』	在+トコロ+動詞	12例 (35.2%)	12例 (66.6%)
	動詞+在+トコロ	22例 (64.7%)	6例 (33.3%)
『ブエノ』	在+トコロ+動詞	35例 (30.7%)	33例 (78.5%)
	動詞+在+トコロ	79例 (69.2%)	9例 (21.4%)
『葡萄物』	在+トコロ+動詞	18例 (31.5%)	18例 (51.4%)
	動詞+在+トコロ	39例 (68.4%)	17例 (48.5%)

『海峡の』	在+トコロ+動詞	17例 (18.0%)	34例 (59.6%)
	動詞+在+トコロ	77例 (81.9%)	23例 (40.3%)
『姑獲鳥』	在+トコロ+動詞	21例 (29.1%)	48例 (73.8%)
	動詞+在+トコロ	51例 (70.8%)	17例 (26.1%)
合計	在+トコロ+動詞	267例 (26.9%)	366例 (68.6%)
	動詞+在+トコロ	723例 (73.0%)	167例 (31.3%)

さて、上の表から何が読み取れるか。この表は「に」と「で」の違いについて何かを語っているのか。

表の数字を見てまっさきに気づくのは、「に」が「在+トコロ+動詞」構文と対応することが少なく、「動詞+在+トコロ」構文と対応することが多いという事実である。そしてこれとは反対に、「で」が「在+トコロ+動詞」構文と対応することが多く、「動詞+在+トコロ」構文と対応することが少ないという事実である。このことから次の仮定が導かれる。

- 1) 場所を表す「～に」は焦点要素となることが多く、非焦点要素となることが少ない。焦点要素としての「～に」と非焦点要素としての「～に」の比率は、約7対3である。
- 2) 場所を表す「～で」は焦点要素となることが少なく、非焦点要素となることが多い。焦点要素としての「～で」と非焦点要素としての「～で」の比率は約3対7である。

この仮定はもちろん、中国語の「在+トコロ」が動詞の後ろにあれば焦点要素であり、動詞の前にあれば非焦点要素であることを前提としている。そして、「に」と「で」の使い分けが調査対象とした小説の中で正確になされていること、さらに日本語から中国語への翻訳が正確になされていることを前提としている。

3. むすび

本稿では、日本語の格助詞「に」と「で」を中国語の介詞「在」と対照しつつ情報伝達という観点、あるいは焦点の有無という観点からそれらの使い分けを考察しようとした。まずはじめに、中国語の「在+トコロ+動詞」構文についてこれが動作に焦点をあてた表現であること、そして中国語の「動詞+在+

トコロ」構文についてこれが場所に焦点をあてた表現であることを確認した。次に、日本語の格助詞「に」「で」と中国語の二つの構文との対応関係を調査した。すなわち、日本語で書かれた小説11作品と、それを中国語に翻訳した11作品を取りあげ、「に」と「で」が中国語で「在+トコロ+動詞」構文と「動詞+在+トコロ」構文のいずれを使って訳されているかを調べた。この調査でわかったのは、「に」は「動詞+在+トコロ」構文と対応することが多く、「で」は「在+トコロ+動詞」構文と対応することが多い、という事実である。この事実から、筆者は、「に」は焦点要素となりやすく、「で」は焦点要素になりにくい、という仮定を導いた。この仮定の正しさを日本語の現実に照らして実証すること、そして先行研究で述べられてきたこととこの仮定との関係を明らかにすることが次の論考の課題である。

注

- 1) 福地 (1983:48-49) は、「情報の伝達とは、話し手にわかっていて聞き手にわかっていないことを伝える行為である。聞き手に全くわかっていることがらを伝えてもあまり意味はない。しかし、話し手は、聞き手にわかっていないことだけを述べるわけでもない。(中略) この意味において、聞き手にわかっていることを旧情報、わかっていないことを新情報と呼ぶ。(中略) 一般に文の要素は、旧情報を担うものを前に、新情報を担うものを後に置く。また、重要な情報を伝える部分はそうでない部分よりも後に置かれる」と述べている。この点については、すでに井上 (1979) の指摘がある。(注7 参照)
- 2) 前置式、後置式のほかに文頭式がある。文頭式とは「在+トコロ」が文頭に置かれるものである。
- 3) 単音節語は、漢字の一文字で表される。一方、多音節語は複数の漢字によって表される。
- 4) 福地 (1985:139) は「1つの言語の中で全く同じ伝達内容を表すのに2種類の構文があることは考えにくく」ということを指摘している。
- 5) 福地 (1983:49) は、「伝達される情報には相対的に重要なものとそれほど重要でないものがある。新情報が伝達上重要であり旧情報がそれほど重要でないことは当然であるが、新情報のなかにも重要なものとそうでないものがあり、また、旧情報のなかにも重要度の軽重があるのが普通である」と述べている。

- 6) 劉 (1992:31) は、「対比をあらわす文では、対比される成分がつねに焦点であり、アクセントも常にそこに置いて発音しなければならない」と指摘している。
- 7) 井上 (1979:25) は、ブラーク学派の機能的構文論 (F S P) によれば、文は、旧から新へという情報構造を持っていることを指摘し、さらにこれを「旧・新の原理」と呼んでいる。また、この原理によると文頭の位置が旧をになう要素の位置、文末が新をになう要素の位置であるとしている。

参考文献

- 井上和子 (1979) 「古い情報・新しい情報」『月刊言語』 Vol.8 No.10 大修館書店
- 井島正博 (1997) 「情報構造の表現機構」『成蹊国文』第30号 成蹊大学文学部
- 神尾昭雄 (1980) 「特集ことばの空間学『に』と『で』」『月刊言語』 Vol.9 No.9 大修館書店
- 呉 中伟 (2001) 「試論漢語句子的主述結構」『語言教学与研究』第3期 総第89期 北京語言文化大学出版社
- 木村裕章 (1990) 「中国語の情報構造」『北九州大学大学紀要』第3号 北九州大学大学院
- 久野 暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『日英語比較選書6—空間と移動の表現—』研究社出版
- 張 志公 (1953) 『漢語語法常識』中国青年出版社
- 張 楨 (1997) 「論決定“在L+VP”或“VP+在L”的因素」『語言教学与研究』第2期 総第72期 北京語言文化大学出版社
- 中右 実 (1995 a) 「『に』と『で』の棲み分け—日英語の空間認識の型(1)—」『英語青年』第140巻 第10号 研究社
- (1995 b) 「『に』への認知転換—日英語の空間認識の型(2)—」『英語青年』第140巻 第11号 研究社
- 中川正之 (1990) 「中国語と日本語—場所表現をめぐる—」『講座日本語と日本語教育12』明治書院
- 原田寿美・滑本忠 (1990) 「『在』に対応する日本語の格助詞」『名古屋学院大学外国語学部論集』第2巻 第1号 名古屋学院大学
- 平井和之 (1987) 「静態動詞に関する幾つかの問題—主に“V在~”形式との関

- 連に於いて一」『中国語学』第234号 中国語学会
 福地 肇 (1983) 「語順にみられる談話の原則」『月刊言語』 Vol.12 No.12
 大修館書店
 ——— (1985) 『談話の構造』大修館書店
 方 梅 (1995) 「漢語対比焦点的句法表現手段」『中国語文』第4期 総第247
 期 商務印書館
 水野義道 (1987) 「場所を示す中国語の介詞(在)と日本語の格助詞『ニ』『デ』」
 『日本語教育』62号 日本語教育学会
 盧 濤 (1997) 『「在大阪住」と『住在大阪』』『中国語学論文集(大河内康憲
 教授退官記念)』所収 大河内康憲教授退官記念論文集刊行会
 劉 鑫民 (1995) 「焦点、焦点の分布と焦点化」『寧夏大学学报』(社会科学版)
 第17卷 第1期
 劉月華ほか (1983) 『实用現代漢語語法』外語教学与研究出版社
 劉月華ほか (1996) 『現代中国語文法総覧』(相原茂監訳) くろしお出版
 劉 月華 (1992) 『中国語の表現と機能』(平松圭子・高橋弥守彦・永吉昭一郎
 訳) 好文出版
 山口直人 (1988) 「“在+処所”に関連する2つの問題」『北九州大学大学院紀要
 創刊号』北九州大学大学院

引用出典

- 『姑獲鳥』……京極夏彦『姑獲鳥の夏』1998年、講談社文庫(姚巧梅訳『姑獲
 鳥の夏天』(上)(下)1998年、時報出版)
 『海峡の』……辻 仁成『海峡の光』2000年、新潮文庫(陳嫻若訳『海峡之光』
 1999年、時報出版)
 『秘密』……東野圭吾『秘密』2001年、文春文庫(許伊露訳『秘密』2000年、
 東販出版)
 『葡萄物』……林真理子『葡萄物語』1998年、角川書店(劉月菊訳『葡萄物語』
 1999年、方智出版)
 『ブエノ』……藤沢 周『ブエノスアイレス午前零時』1998年、河出書房新社
 (劉名揚訳『布宜諾斯艾利斯午夜零點』2000年、時報出版)
 『胸の香』……宮本 輝『胸の香り』1999年、文春文庫(涂歆平訳『胸之香味』
 1999年、麥田出版)
 『石の森』……三浦綾子『石の森』1979年、集英社(朱曉蘭訳『石之森林』2001

年、新潮社)

『風の歌』……村上春樹『風の歌を聴け』1982年、講談社文庫(頼明珠訳『聽風的歌』1995年、時報出版)

『カンガ』……村上春樹『カンガルー日和』1986年、講談社文庫(頼明珠訳『遇見100%的的女孩』1995年、時報出版)

『水辺の』……柳 美里『水辺のゆかりかご』1997年、角川書店(章蓓蕾訳『水邊的搖籃』2001年、麥田出版)

『哀しい』……吉本ばなな『哀しい予感』1991年、角川書店(吳繼文訳『哀愁的預感』1996年、時報出版)

* “()” の所は中国語訳本の訳者、書名、年度、出版者である

